

白い月



mikatuki98

何処かの観光地で10人前後の人だかりがしていた。

『皆で集まって何をしているのだろう？』

通りすがりにチラリと人だかりを横目で見ると、綺麗な柄の布を広げている。

人々の話し振りから、その布はどうも歴史的に有名な人物が身に纏っていた代物らしい。

遠目で見ただけでは、多彩な色使いで花柄なのか幾何学模様なのか、良く分からないゴチャゴチャとした柄のその生地は、絹のようでベールのように薄っぺらい。

しかし、アンティークと分かった時点で何となく気持ち悪くなった私は背筋が寒くなって身震いがした。

『どんな有名な歴史上の人物が身に纏っていたのか知らないが、手に触れるなんて到底私には出来ない！』

何故かそんなことを思いながら人だかりから離れてフラフラと歩いていると、小さな湖に出来た。

湖の向こう岸には、男が座って何かをしているのがぼんやり見える。

目を凝らしてよくよく見ると、一生懸命何かを作っているようだ。

『何を作っているのだろう？』

そう思った途端、私は男の側に来ていた。

「私は弦楽器を不意に作りたくなったので、この湖にやって来たのだ」

尋ねる前に男が答えた。

『弦楽器？』

「そう、弦楽器！」

一度も声に出さないのに、男は私の心の声が聞こえているかのように答える。

『何故、弦楽器なのだろう？』

そう思った途端、男が答える代わりに、いつの間にか出来上がっていた弦楽器の音がポロンと湖一帯に響いた。

気が付くと、男は居ない。

その代わりに、再び湖の向こう岸に、今度は女が立っていた。

女は白いベールを纏い、透き通るような白い肌をしたうら若き乙女に見える。

ただ黙って微笑んだまま立っている姿は、この世の人とは思えないほど幻想的で美しい。

しかしよくよく見ると、乙女は岸ではなく水面の上に立っていた。

『ハッ！ これは……』

何かを悟ったように反応した途端、乙女の美しい姿からは想像も出来ない程のドスの利いた声が、乙女の腹の底から聞こえて来た。

「わっはっはっはっはっ！ やっと分かったか！

何百年もの間、俺様はこの乙女の身体にのりうつって生き延びてきた。

それがやっと弦楽器の音によって浄化され情念の鎖から解き放たれたのだ。

吾、白龍なり！ 晴れて昇天の期、満ちたり！ さらばじゃ！ わはははは……」

白く長い龍の身体は見る見るうちに上昇して行き、白雲にまみれ見えなくなってしまった。

透き通るような身体は湖に溶けてしまっただろうか？ 最早、乙女の姿も湖には無い。

白龍の昇った東の空には、明日は満月を迎えるだろう大きな白い月が、日が暮れるのを待たずに、ただその静寂に満ちた姿を見せているのだった。 了